

称号及び氏名 博士（経済学）小村 弘

学位授与の日付 令和7年3月31日

論文名 歴史的市街地ならまちの観光地化に関する研究
—まちづくりの主体と歴史文化資源の利用から—

論文審査委員 主査 橋爪 紳也
副査 上村 隆広
副査 花村 周寛
副査 天野 景太

論文要旨

近年、わが国における歴史的市街地では、人口の減少や住民の高齢化、商業地区の衰退などを背景に、歴史的建造物や街並み、ひいては伝統文化を維持できない地域が各地に生じている。

このような状況下にあつて、2008年に「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」が制定され、歴史的建造物や歴史・伝統にかかわる人々の活動を一体として保全しながら、歴史的市街地を整備する方向性が示されている。いっぽうで外国人観光客の増加を背景に、文化資源を用いた観光まちづくりの促進が求められている地域も多くある。

本研究は、奈良市の中心市街地である「ならまち」を事例として、歴史文化資源の特徴を整理・分析し、まちづくりの主体の動向に着目し、観光まちづくりの進捗によって、歴史的市街地が再生するプロセスとそこに見出される特徴を明らかにするものである。

対象とするならまちは、平城京の外京に位置し、都が長岡京さらには平安京に移ったのちも、商工地として発展し、今日まで市街地が維持された。地区内には、古代から中世に創建された寺社が多く残ることから、宗教都市を基盤としつつ、商工業都市としての履歴を重ね、さらに近代になって上地令により寺社の土地の多くが奈良公園として整備された結果、観光都市としての側面が強まる。その後、中心市街地の衰退を見るが、1970年代以降、さまざまな主体による観光地化が進展している。

第1章では、先行研究から歴史的市街地における分析のフレームについて検討を行ない、歴史文化資源に着目した観光まちづくりの必要性を示した。

第2章では、観光情報雑誌および奈良市歴史的風致維持向上計画の記載内容を整理・分析し、宗教都市、商工業都市、観光都市としての多様な都市基盤を有していることから、町家の暮らし、伝統工芸及び茶の湯文化などを歴史的風致として位置づけていることを明らかにした。

第3章では、景観、歴史的資源、商工業や観光の各視点から、古代から近代に至るならまちの変容を検証、観光まちづくりの動向について取組み主体の面から分析を行った。

第4章では、奈良市の行政施策やまちづくり組織の動向について経年的に分析を加えている。1975年に街並みや町家保存に関する住民の意識が高まり、1979年に民間のシンクタンクである奈良まちづくりセンターが活動した。これを受けて奈良市は景観保全に関する施策を展開し、空地や空き家になった町家の買収を進め、観光施設に転用した。以上の結果から、1990年代までの観光まちづくりは、行政がまちづくり組織と連携して進めたことを明らかにしている。

第5章では、1990年代後半に顕在化した老舗の動向と、観光まちづくりへの関与について考察を行なっている。元興寺旧境内周辺にある漬物や酒造業などの老舗は、食文化体験の場を創出し、ならまちなにぎわいの起点となったことを指摘する。一方、JR・近鉄奈良駅周辺や奈良公園の老舗は、自社商品のブランド価値向上を目指しつつも、文化体験の機会を提供、いわば老舗主導型の観光まちづくりが進展したことを実証している。

第6章では、1970年代から現在に至る約50年間について、飲食店や雑貨店などの出店の推移を調査した結果、飲食店や雑貨店は広範囲に分散していることを確認し、個人主導型の観光まちづくりと位置付けている。

第7章では、来訪者の訪問意向をあきらかにすることから、個人主導型観光まちづくりにおける町家の利用実態を分析、評価を行なっている。

第8章では、個人主導型観光まちづくりにおける持続的なにぎわい創出のため、小規模店舗に着目し、ならまち、および、もちいどのセンター街における小規模店舗の実態を調査した。結果として持続的なにぎわい創出のためには、小規模店舗などの出店環境を整備する必要があることを指摘した。

第9章では、ならまちの観光地化が産業都市、観光都市、商工業都市などの多彩な都市基盤をもとに、町家や景観の保全が進められた期間を経て、景観基盤形成期、観光空間形成期、観光空間拡大期に至る4つのプロセスから促されたことを論じ、あわせて観光まちづくりが、行政・まちづくり組織主導型、老舗主導型、個人主導型の各段階に関わっていることを明らかにした。

結果として、ならまちには古代から近世に至る多くの歴史文化資源があり、専門知がないと価値付けすることができない歴史空間であると定義し、そのうえで時間的なスケールと資源の類型がモザイク状となっていることから「モザイク都市」としての

特徴を有していると考えられることを指摘して結論としている。

さらに近年、情報技術が進歩し、観光分野においても DX の導入が進められている。モザイクの概念と DX を結びつけることにより、専門知が必要でない歴史空間として、観光客を誘引するモザイク都市の最適化が可能になると考えられることを指摘して展望としている。

審査結果の要旨

歴史的市街地を対象とした先行研究では、文化財保護行政や景観行政に関する研究や、まちづくり組織の活動に関する分析などが中心であり、歴史文化資源を踏まえた観光まちづくりに着目した研究は少ない。また観光まちづくりに関して、主体と観光地化のプロセスを分析する研究も類例が少ない。さらに言えば近年、急速に観光地化が進捗している、奈良市の中心市街地である「ならまち」を対象とした観光的な研究も皆無である。以上の3点において、本研究は独自性と新規性が高いと考える。多様なアプローチから、歴史的市街地が観光地化するプロセスと、中心となる主体を分析する本研究の着眼点と方法論は、他都市における歴史的市街地の観光地化について論じるうえでも有効であり、今後、比較研究に発展させることが期待される。観光地の持続的発展を考察するうえで、ならまちを「専門知がないと価値付けできない歴史空間」とみなし、市街地に「モザイク都市」の特徴を見出す本研究の結論に関しては、最終試験でもその意義に対して議論がなされたが、一定の結論として十分に論証されていることから、審査会にあっても有効な枠組みの提示であるという結論に達した。